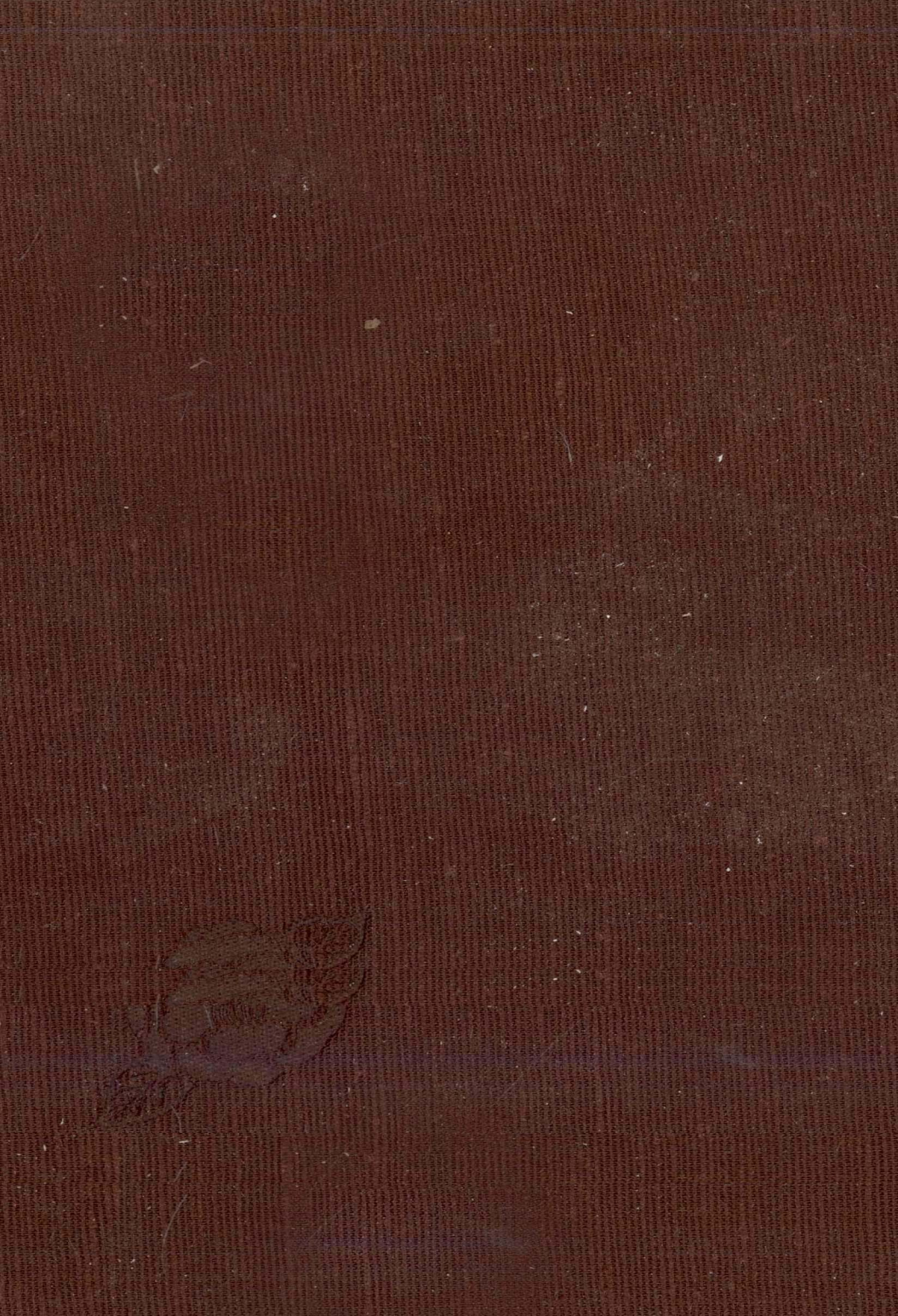

# 高濱虛子全集

第八卷　寫生文集一

毎日新聞社

〈編集委員〉
高濱　年尾
福田　清人
深川正一郎
松井　利彦
山本　健吉

定本　高濱虚子全集
第八巻　寫生文集（一）
印刷　昭和四十九年三月二十五日
発行　昭和四十九年四月　五　日
著　者　高濱虚子
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
装　幀　熊谷博人
題　字　矢萩春恵
発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ッ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉北区紺屋町
〒450　名古屋市中村区堀内町
印刷所　図書印刷
製本所　大口製本
0392-480008-7904

第八卷　寫生文集　(一)

目　次

寒玉集……九
第一篇
淺草寺のくさ〴〵……一三
(一)昔と今／一三　(二)仲見世／一三　(三)淺草寺／一三　(四)奥山／一九　(五)公園の夜／二〇　(六)矢場、銘酒屋／二三
中山寺……二七
三つのもの……三一
一日（三十二年四月十日）……三三
三尺の庭……三六
浴泉雑記……三九
(上)／三九　(中)／四六　(下)／五二
第二篇
百八の鐘……五七
猫の死骸……六三
寫生文集……六七
二里の山路……六九
寫生文集　帆立貝……七七
幻住庵の跡……七九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

影法師……八五
石棺……八七
麓茶屋……九四
玄女節……九八
蠟燭……一〇五
新寫生文……一〇九
叡山詣……一一
叡山遠望(一)／一一　叡山遠望(二)／一一　叡山遠望(三)／一一　比叡山麓／一四
山上宿院／一五　宿院の夜／一七　根本中堂／一九　力餅屋／一三　宿院の風呂／
一五　鳥の聲／一七　賑やかなる山上／一八　無動寺行／一〇　横河まで／一三
横河中堂政所／一五　横河中堂／一七　子供の手紙／一九　下山／一四
虚子小品……一四五
古川の奥さん……一四七
辰サン……一五五
さしる……一五九
露月を女米木に訪ふの記……一六一
虚子文集……一七五

死絶えた家……一七七
澤子の嘘……一九六
鐵幹君の送別會……二〇一
朝の庭……二〇九
カナリヤ……二一一
山の家……二一五
丸ノ内ビルディング……二二三
二三片……二三一
丸の内……二三三
新舊文明の調和／二三三　震災後の丸ビル／二三五　東京驛／二三七　丸ビルの朝／二三九
日本間／二四一　帝劇／二四三　スカイライン／二四四　今昔／二四六　雨／二四八　蝶／二五〇
丸ビルの日曜日／二五一　バラック建ての中央郵便局／二五四　丸ビルの食堂の惜別
／二五六　丸ビルを出て其所らあたりを／二五九　丸ビル食堂の薄紅梅／二六一
時雨をたづねて……二六三
新俳文……二九九
桐の木を伐ること……三〇一
境の町……三〇四
お一二……三〇七

松山鏡……三一
楠本老人……三四
其の男……三九
大阪の墓……三三
S……三七
蘆火……三三
箒草……三五
上／三五　下／三七
古江……三八
紀行文・俳文……三三
掏摸……三五
土偶の坊……三八
下足札……三五
眼鏡を忘れて……三九
胴突き……三六
母の手紙……三八
櫻に雪……三七
古曲鑑賞會……三九

六十以上……三八二
私の謠……三八四
ヒコ……三九一
三で割切れる……三九四
不動門前……三九六
故郷……三九九
時雨日和……四〇二
俄か吹雪……四〇八
來吉紙碑……四一二
郷里……四一九
明治三十二三年頃の根岸の或夜……四二五
——小説「栃二つ」の片々——／四三五
不動明王……四三五
げてものは嫌ひ……四三七
高濱彦藏……四四三
校異篇……四五三
解題……前田登美……四八一
解説……福田清人……四九一

第八卷

# 寫生文集

(一)

# 凡例

一、本集は、『寒玉集』、『寫生文集』、『帆立貝』、『新寫生文』、『虚子小品』、『さしゑ』、『虚子文集』、『朝の庭』、『二三片』、『新俳文』、『紀行文・俳文』所收の寫生文を用いて底本とした。

一、所収写生文の初出の新聞、雑誌名、年月日は解題で明らかにした。

一、校異篇を設け、本文と新聞、雑誌初出の写生文、他の単行本に収めた写生文とを対比、異同の個所を明らかにした。

一、この集に関して校合した新聞、雑誌、単行本名を記すと、『高濱虚子全集』(改造社)、『定本虚子全集』(創元社)、『俳句文學全集・高濱虚子篇』(昭12・第一書房)、『現代日本文學全集66高濱虚子集』(昭32・筑摩書房)、『十五代將軍』(大6・阿蘭陀書房)、「ホトトギス」、「改造」、「玉藻」、「讀賣新聞」、「東京日日新聞」、「國民新聞」である。

一、本文は、底本の用字、仮名遣い、誤植、ルビは原則としてそのままにすることとし、誤植にはママを附した。訂正は校異篇による。ただし底本が総ルビの場合は原則として、ルビを削除した。

一、難訓については初出の個所で新しくルビを附した。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 寒玉集

# 第一篇

雑誌ほとゝぎすに載せたる紋事文を輯めて寒玉集と題す。本篇に收めたるは同誌第二卷（自明治卅一年十月、至卅二年九月）に載せたるものを悉くす。子規子嘗て新聞日本紙上に於て歳晩歳始の紋事文を募りたる際この種の文を論じたるもの一篇あり。左に轉載して以て本篇の序に代ふ。（虚子識）

# 淺草寺のくさ〴〵

## （一）昔と今

『續あけがらす』に

漁船見えぬ濱の秋風　几董

芒刈て假（ママ）に安置す彌陀如來　同

國司の情歌に聞こゆる月居

といふ兩吟中の一節あり。金龍山淺草寺の昔物語りは如何にと心に尋ぬる時余は此の句を回想せざること無く、而して此の句を誦する毎に淺草寺草創の當時の面影目に見えて、それかと許りになつかしきこと多し。それは觀音これは彌陀の、或は漁夫の網などにやかゝらせ玉ひけん、汐風の時には吹き荒るゝてふ芒一坪許り刈り除き、漁夫か百姓か、爰に五六人もうち集ひて、今しも安置し奉りたるらしき佛を一人のうち拜みゐる樣など、此の句に就て想像せらるゝところのもの、是れやがて淺草寺の緣記繪（ママ）卷物なるべくや。

而して今や如何

實相非莊嚴金碧裝成安樂刹

眞身絕表象雲霞畫出補陀山

其の境内は帝都三大公園の隨一に數へられて、丹壁朱欄の大伽藍は雲に聳え、日に幾萬の善男善女爰に集りて賽

錢の音空に響く、誠や實相圓滿、皆に黑子一つなき觀音樣、それが紅粉眉刷毛に雲霞畫し出す補陀の山。爰に打ち出す入相の鐘は遠く角海老の時計に響きて、之より夜を晝の電燈明に、塒に歸る鴉にも謀反心を起こさしめ玉ふ、扨ても罪造りの佛樣とポント背うつ第五區の繁昌記は後に讓りて、顧みて三日月芒に落つる彼の草創の昔を思ふ、星遷り物變るとは此事にもや、桑田變海とは此事にもや。

## （二）仲見世

仲見世の繁昌は芝居の茶屋に異らず。丹塗りの見事なる山門の引幕は正面に雲に聳えて、紅梅燒あれば白梅燒あり、豆腐御料理あれば宇治の里御茶漬一人前五錢あり。下足番は、久米平內兵衞長盛が昔乍らの佛頂面に娘子供をいやがらせ、仁王の草鞋を穿いて一寸小便に行くはおつくうなり。聞くならく輕燒は舊弊にして輕便燒が當世なりと。若かず一寸汁粉屋梅園の便所を借りて序でに指の藥をも求めんには、是れ唐辛子を摘み食ひして腫れたるお三の指に特效あるとなり。

## （三）淺草寺

何事も金の世の中なり。本尊樣が金貨本位の黃金佛なるか乃至は拂渡手形なるかを問はず、一寸手を洗ふにも長柄の杓に一文を投ぜざるべからざるぞ勿體なき。若し投ずる所のもの銅貨なる時は、少し赤錆びたるも交りて九文の釣り錢を戴くぞ尙ほ更に有難き。爰に一文を費したるの故を以て、鳩に豆やることを儉約し直ちに堂に登る時は、正面に當りて第一に大いなる常香盤目に入るべし。銘に曰

金龍山淺草寺觀世音尊前

願我身淨如香　　願我心智惠火

念々焚燒戒定香　　供養十方三世佛

此の香一捻一文必ずしも不廉ならず。唯八十老媼が杖に倚り縞の財布より出して投ずるところの一文を鼻であしらい、ハンケチ首に色眼鏡あやし氣なるが（恐ろしや女の眼鏡年の暮）お釣りはいりませんよと銅貨に幅を利かすところ、坊主の頭に對して勘忍なり難きところなり。乃ち横を向けば

金龍山本堂保存寄附金取扱所

これは坊主でない斬髪の男の帳面を開けて、入らつしやい顏なるに唾すべく、又其に双びて

福田會育兒施入錢

といふは殊勝なれど、箱の慾氣に大いなるが癪なりとよく見れば

市川團十郎　尾上菊五郎　市川左團次　岩井半四郎
中村仲藏　中村宗十郎　守田勘彌　三遊亭圓朝

是等の羅漢達が世話人と聞いて有難き事に思はざるを得ず。

斯るところ鳩は夥しき額の後ろに隱れ、欄間を潜り、此奴貧乏人と見れば忽ち糞をひつかけてくう〳〵と笑ふなど腹立たしきことなれど、何を申すも

佛身圓滿無背相
十方來人皆對面

更に財布を探て賽錢を投ぜざるを得ざる樣になる也。而も賽錢箱は前後二個あり、一個は千疊敷の如く一個は八疊敷の如し。一個に投じて他の一個に投ぜざる時は、御利益半分とでもいふ勘定になりては虻蜂取ずとの胸算用に大枚二文を散財するもあるべし。

本堂の美は三ヶ處のお札賣捌所に集められたるが如し。西陣の織物屋に行けば足元にも取り散らされたらんきれ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com